



学校だより

7月号

横浜市立東本郷小学校

令和 8 年 6 月 29 日

ひとにやさしくありがとうの心で がんばるがんばる最後まで 本気で取り組むひがほんの子

大人が思うより、ずっと。

学校長 堂腰 康博

わたしたちが思う以上に、子どもたちは強く逞しく成長しています。普段の学校生活やご家庭の中では、つい「大丈夫かな…」と心配の目を向けてしまいがちですが、先日、子どもたちの自立する姿に、胸が熱くなる出来事がありました。

それは、6月12日（金）の激しい雷雨の日のことです。

低学年の下校時刻と重なってしまうため、正午からレーダーで雨雲や雷の状況を注視し、安全を確認し、「すぐーる」で連絡したうえで下校の判断をしました。しかし、自然の急変は予測を超えていました。子どもたちが「さようなら」と昇降口を出てまもなく、空模様が一変し、冷たい突風とともに、まさにバケツをひっくり返したような土砂降りになってしまったのです。下校の見守りをするため、後ろを追いかけたわたし自身、激しい雨と地響きのような雷鳴に足がすくむほどの状況でしたが、子どもたちは違いました。

「みんな、高い木から離れて！」「姿勢を低くして！」3年生を中心に、教室で学んだ防災知識を懸命に思い出し、互いに声を掛け合っていたのです。ただ怖がって立ち尽くすのではなく、周囲の状況をよく見て、今何をすべきかを自分たちで考えていました。泣きそうな気持ちに堪えながら道にしゃがみ込む姿は健気でありながらも、自ら命を守ろうとする力強さに満ちていました。

同じ頃、校舎の昇降口に残っていた上級生たちも、不安そうに空を見上げる1年生の手を握り、「大丈夫だよ。ここにいれば安全だからね。」と声をかけ、寄り添い続けてくれていました。教師が指示を出すよりも前に、誰に言われるでもなく生まれた、思いやりの行動だったといえます。大人目や手が届かない一瞬の空白の中で、下級生を支える行動をとってくれていたのです。

これらの姿を受け、6月23日の全校朝会では、東京都北区の小学校での火災事例を交えながら「想定外にとらわれず、自分で考えて動くこと」の大切さを改めて呼びかけました。わたしの緊迫した話ぶりに、子どもたちは静かに、しかし真っ直ぐなまなざしを返してくれました。その瞳の奥には、「自分の命は、自分が守りきる」という覚悟が宿っているようにも見えました。あの雷雨を乗り越えた子どもたちだからこそ、朝会での話の重みが、深く染み渡ったのだと感じました。

これから迎える夏、子どもたちは様々な自然のリスクと向き合うこととなります。連日のように報道される台風や地震のニュースに触れるたび、「どこにいても、自ら考えて命を守る行動がとれる力」を育てる重要性を強く感じています。「もし、旅行先で地震が起きたらどうする？」「川にいて、急に大雨が降ってきたらどうすればいいと思う？」ご家庭でもお子さんに問いかけてみてください。

きっと、わたしたちが思う以上に頼もしい答えが返ってくるはずで、「誰かがいるから安心」ではなく、自分の力で生き抜く強さを、これからも学校と家庭、地域で手を取り合い、育てていきたいと考えています。

